

3  
「ア」  
の  
消  
失



Miyuki

時計の針が午前一時を指していた。

僕の腕時計はつまらない安物だ。いつでも時間が正しくない。でも、それはいいことなのかもしれない。世の中の時間と自分の腕時計の時間がぴったり同じなのは、なんだか居心地が悪い。僕にはそういうところがある。突然、皆の輪から外れて一人で考えたくなるときがある。

街灯が点々と灯る暗い夜道を歩きまわり、これまでのことや、これからのことをあれこれと考えるうち、またいつのまにか誰かに会いたくなってくる。

といて、僕が気安く会える相手は限られていて、無闇に歩きまわったせいで空腹にもなり、そういうとき僕はいつもゴー君の「オキナワ・ステーク」に足を向ける。

このあたりで深夜一時を過ぎても開いている店

はほとんどない。ましてや、へオキナワ・ステーキのように朝方までステーキが食べられる店となると、このあたりどころか、隣町まで範囲をひろげても皆無に等しいかもしれない。

「もう、しんどいわ」

ゴー君はため息まじりにそう云った。

「親父のころはそれでよかったかもしれないけど、朝まで店を開いてる意味があるのかないのか、わからなくなってきた」

ゴー君の父親は沖縄の出身で、東京へ出てくる前は那覇なはで深夜喫茶を営んでいた。その店の名物が深夜のステーキで、沖縄の酒飲みたちは飲んだあとのシメにステーキを食べる習わしがある。それでへオキナワ・ステーキも深夜営業のステーキ屋になった。

僕はゴー君のことならたぶん何でも知っている。店で働いている六つ歳上としようえのハルミさんにひそかに恋心を抱いていることも——これは彼の口から直

接聞いたわけではないけれど——知っている。

「もう、しんどいわ」が口癖で、そう云っているうちは大してしんどくもないことを知っているし、なにしろ、ハルミさんが「オキナワ・ステーキ」で働くようになってから、ゴ―君は「しんどいわ」と云いながらも確実に目が笑っていた。

「俺もいよいよ独身を卒業して、そろそろね」

そんなセリフを口にするようになり、それでいて、ハルミさんに対してあからさまに目尻めじりを下げるようなことはない。あくまで店主と従業員の関係を保っていた。

というか、本人はポーカーフェイスで通しているつもりなのだろうが、僕から見れば、彼が必死に理性を保とうとしているのがよく分かる。

もつとも、これはハルミさんにも伝わっているようで、つまり——これもまた本人に確かめたわけではないけれど——ゴ―君の思いをハルミさんは察知しているようだった。

「今晚は、太郎たろうさん」

いつものカウンター席につくと、コップに  
ただ水を僕の前にそっと置きながらハルミさんは安  
定の笑顔で迎えてくれる。常に落ち着いていて、  
涼しげな目もとと特徴的な唇のかたち<sup>たち</sup>が往年のロ  
ーレン・バコールによく似ている。

もし、本物の「流し目」を至近距離で見ただけ  
ば、〈オキナワ・ステーキ〉のカウンターでハル  
ミさんに注文をすればいい。

「いつもの。百グラム。ミダイヤモンド・レアで」  
僕がそう云うと、体を斜めに構えて注文を復唱  
しながら伝票に書きとっていく。そして、書きと  
った最後の一瞬、こちらに流し目を送ってくる。

健康志向が蔓延<sup>まんえん</sup>して深夜にステーキを食べよう  
という客は年々減っているが、それでも、〈オキ  
ナワ・ステーキ〉がどうにか存続しているのは、  
ハルミさんの流し目にぞくりとなつた男たちが常  
連になっているからだろう。ハルミさんはつまり  
看板娘で、ゴー君が彼女に抱いている思いを隠し  
ているのは、常連たちの<sup>ひんしゆく</sup>響<sup>ひんしゆく</sup>を  
買わないためでも  
あつた。

〈オキナワ・ステーキ〉は小さな店で、カウンターの十席と四人がけのテーブルが二つしかない。カウンターの中央の鉄板でゴー君が肉を焼いている。店内は一九七〇年代からほぼそのままで、子供のころは父と母と姉の四人でよく食べに来た。

マリリン・モンローの色褪せたポスターが貼つてあるのは先代の趣味で、モンローとバコールではなく、ぶん印象が違うから、ステーキを美味しく焼き上げる手腕はそっくり同じでも、女性の趣味は引き継がれなかったのだろう。

「百グラムにしとけ」と云ったのはゴー君だった。「親父がよく云ってたよ。夜中のシメのステーキってのは、少しだけさつと食べて切り上げる、そういうもんだって」

ゴー君が店を引き継いで初めて店主として鉄板の前に立ったとき、僕が「ご祝儀代わりに」と無理をして五百グラムのオーダーをしたら、ゴー君が顔を近づけてきて、「百グラムにしとけ」と小

声で云ったのだ。

僕がゴー君のことを何でも知っているように、彼もまた僕のことをたいてい知っている。たいていのことは彼に話してきたからだ。

だから、いつものように百グラムのステーキを平らげたところで、アルフレッドが故郷に帰って家業を引き継ぐことになったと話すつもりだった。

ところが、いざ話そうとしたところで、突然、店のドアが開いて風が吹き込んできた。僕もゴー君も——それにハルミさんも——揃そろってドアの方に目を向けると、傘かさを小脇こわきに抱えたミュキさんが立っていて、背後から吹きつゝのる風にコートをはためかせていた。

「今晚は」

と、その声もまたはためいて聞こえる。

ミュキさんが〈オキナワ・ステーキ〉にあらわれたのは何年ぶりだったろう。少なくとも、この何年か訪れていないことはゴー君の横顔から見て

とれた。「いらっしやい」ではなく「ひさしぶり」とミユキさんに応え、ミユキさんはしかし僕の顔を認めると、学生のころに戻ったように、

「ああ、お腹なかすいた」

と子供じみた物云いになった。

店の壁と一体化した油まみれの時計が、あと十五分で午前二時になるうとしている。

傘を抱えたまま隣の席についたミユキさんに、

「あの——」

と声をかけると、

「ゴー君、ステーキ。二百五十グラム。レアで」

注文をしてから、

「なに？」

と、ついでのように僕の顔を見た。

「いや、お店の方はどうなったのかと思って」

「お店って？」

「あれ？ ミユキさんはロールキャベツの店を開くんですよね」

「あ、決まったんだ」とゴー君はまだ詳しいことを知らないらしい。



「うん」とミユキさんはそこで大きくひとつ頷うなずいたが、それから急に首を横に振って、「無理無理無理無理」と、うつむいたまま低い声になった。

このあいだ編集室に来たときのミユキさんとはずいぶんと印象が違って見えた。まるで背中を支えていた芯棒しんぼうが抜け落ちてしまったようで、化粧をしていないせいもあつて、目の下の隈くまがやけに目立っている。

「ええと——」

何をどう云つていいか分からず、

「何か手伝えることがあったら」

と威勢よく云つてみたら、

「そういうんじゃないの」

ミユキさんは大きく三回、首を横に振った。

「気が散っちゃつて、集中できなくて——その、なんとというか——見られてるみたいで」

「見られてる?」

ゴー君が焼く二百五十グラムの肉がジュウジュウと雨降りのような音をたてた。

「そう、見られてるし、追いかけてるし」

「ストーカーですか」とハルミさんがさりげなく話に加わり、「え、なにになに？」とゴー君は肉の焼ける音でよく聞こえないようだ。

「いや、そうじゃなく」とミユキさんはまた大きく三回、首を振り、「でも、そうなのかな」と弱々しく付け加えた。

「これまでもあったんですか、そういうこと」「ないです」ときっぱり答えたものの、「こっちへ帰ってきて——」と最後の方はつぶやきになってよく聞きとれない。

「見られてるって、どんなときですか？」

「ふと気づくとね。部屋の中にいるときはベランダの方から。外を歩いていたら後ろの方から。こないだは、〈バイカル〉でコーヒーを飲んでいたら、店の外からこちらを覗き込んでいて——」

「男の人ですか」とハルミさんがようやくタイミングを見つけて、水をついだコップをミユキさんの前に置いた。

「そう」とミユキさんは唇を尖らせている。

「知っている人ですか」とハルミさんが意識的な

のか、無意識なのか流し目になると、ミュキさんは急に尖らせていた唇を結んで、それきり何も云わなくなった。

ちようどステーキが焼き上がって、ライスを盛った皿と一緒にジュウジュウ音をたてながらあらわれた。

「いただきます」

ミュキさんは手を合わせてからナイフとフォークを握りしめ、急にそれまでの憂いが晴れたかのように目を輝かせた。

「最高よ、夜中のステーキ」

僕らがそこにいることなど忘れてしまったように、なりふり構わず食べ始めた。

\*

次の日の昼に仕事場へ向かう途中、なんとなくなく気になって、〈あおい〉の前を通った。

が、暖簾のれんがさがったままで、店の改装が始まっている気配はない。

ゴー君の店を出て、「じゃあ」と帰ろうとする  
ミュキさんに「送ります」と声をかけたら、

「いいの、ほっといて」

と早口で断られた。

そもそも、ミュキさんは町に帰ってきたと云う  
けれど、どこに住んでいるのか分からなかった。  
とりあえず、両親のいる実家に戻ったのかと思っ  
ていたが、

「いま住んでいるアパートは誰にも教えたくない  
の」

昔からそうだったが、ミュキさんはこういうと  
き有無を云わせなかった。

「わたし、これから一人で生きて行くから」

「じゃあ、メールのアドレスだけでも——」

「だって、太郎君はアルフレッドの部屋にいるん  
でしよう？ 会いたくなったら会いに行くし、そ  
っちもわたしに会いたくなったら、わたしの店に  
来ればいいじゃない」

そう云ってミュキさんは「とにかく、ついてこ

ないで」と捨てゼリフを残して足早に帰ってしまった。よっぽど、めげずについて行こうかとも思ったけれど、そうになると、なんだかこちらが不審者のようになってしまう。

仕事場に出ると、ここのとろろずとそうだったがアルフレッドの姿がなく、大人しく寝ているモカの頭をひとしきり撫なでて、手を洗って、うがいをして、コーヒーをいれて、テーブルについた。ノート・パソコンの上に何か置いてある。

封筒だった。

表に「太郎へ」とアルフレッドの字で書いてあり、中からどきりとするような真っ白い便箋びんせんが滑り出てきた。

「本日のヒコーキに乗ります。モカをよろしく。アルフレッド」

愛用していたブルー・ブラックのインクで簡潔に書かれている。

「追伸」とあり、「失敗からしか成功は生まれない」と書き添えてあった。アルフレッドの座右の

銘だ。事あるごとに彼はそう云っていた。

気づくと、三月が終わろうとしている。三月は何もかもが終わっていく月だ。冬の寒さの終わりでもあり、寒さがドアを閉めて向こうへ行ってしまう後ろ姿が目に見えるようだ。

夜中の十字路でミユキさんを見送り、置き手紙を開いてアルフレッドの旅立ちを見送り、そしてドアの向こうに寒さを見送ろうとしている。

窓の外を見た。

毎年、同じことを思うが、桜というのはまったく突然咲き始める。自分がぼんやりしているせいかもしれないが、ほんの二、三日前まで何の色気もない枯れ木のようにであったのに、ひと眠りして目覚めると、夢のつづきみたいに桜が咲いている。

咲いた花には風がつきもので、咲いた途端に一陣の風が吹いて、咲いたそばから次々と散っていく。もし、そこに何らかの因果があるとしたら、開花の予感突然の風がヒントになる。

ミュキさんが「オキナワ・ステーキ」に入ってきたとき、それまで音沙汰おとぎたのなかった風が急に吹いて、こちらの前髪までおおられた。ゴー君はおどけたようにのけぞり、ハルミさんは風に立ち向かうように顎あごをあげて涼しげな目を細めた。

あるとき僕は、ミュキさんについて「風」を呼び込んでしまったのだと思った。

ミュキさんが心酔している「メアリー・ポピンズ」は云うまでもなく児童文学の主人公の名で、『風にのってきたメアリー・ポピンズ』『帰ってきたメアリー・ポピンズ』『公園のメアリー・ポピンズ』などシリーズで何冊がある。

そのタイトルドおり、ミュキさんはいこのあいだ町に「帰ってきた」わけで、そのうえ昨夜は「風にのってきた」かのようにあらわれて、ゴー君の店の「とびらをあげた」のだ。

つまり、ミュキさんはメアリーを真似まねているうちに、「メアリー」に含まれている言葉や現象ま

で引き連れてきたことになる。

ついでに云っておくと、メアリー・ポピンズは映画化されたときに名前から「ア」の一字が抜け落ちて、「メリー・ポピンズ」になった。

われわれがまだ中学生のとき、メアリーにかぶれたミユキさんの格好をアルフレッドが面白がり、そのとき彼は、Maryがメアリーになったりメリーになったりする日本語の表記を不審がった。

原典の翻訳本はメアリーだったが、いまや、「ア」が抜けた映画のメリーの方が名を馳せている。ミユキさんのコスプレもメアリーやメリーを真似ているというより、メリーに扮したジュリー・アンドリュースの衣装を真似ている。そうなのと——これはミユキさんには内緒だけれど——彼女が踏襲している女性の名は、もはや、「ジュリー・ポピンズ」と呼んだ方が正しかった。

僕としては、図書室の棚に並んでいた「メアリー」に思い入れがあり、省略されたような「ア」の欠落は、メアリーがコートのポケットから手袋



を取り出したときに、うっかり「ア」の一字を取り落としてしまったような残念さがあった。

窓の外のまだ枯れ木のような桜を眺めて風を読もうとしたが、吹いているのかいないのか、部屋の中からよく分らない。

僕はしかし、アルフレッドが本当にいなくなっってしまったことをすぐに受け入れられず、「ア」の消失に関するどうでもいいような考察を頭の中のノートに書き連ねていた。

しかし、その消えてしまった「ア」のひと文字は、アルフレッドが署名の代わりに原稿の末尾に書いていた（ア）の一字を思い出させる。

この先、自分ひとりで〈流星新聞〉を発行していくとなると、その紙面からアルフレッドの（ア）の一字が消えてしまうことになる。

これまでどれくらい（ア）が紙面のあちらこちらに置かれていただろう。それは、ひろげたシートが風に飛ばされないよう、要所要所に置かれた重しのようなものだった。

たとえ安物であっても、僕の腕時計の針は確実にまわって時を前へ進める。

地球を回していく時間が前に進むから僕の腕時計が回るのではなく、僕の安物時計が時を刻むので、この世界も前へ進んでいく——どうしてか、そんなふうに感じる。

これは時計をしているかしていないかには関係なく、それが高級か安物であるかも関係ない。時計などなくても、自分は前へ進んでいくしかなく、それはもうとつくに始まっていて、一旦始まったいったんらまわりつづける秒針の動きに従うしかない。

そうすればきつと、そのうち花が咲く。咲いて散って、また咲いて、何度でも繰り返し、どこまでもつづいていく。消えてなくなるということはない。消えても、またきつとあらわれる。

桜はこの季節のほんの短い時間の中で、そのことを懸命にこちらへ伝えようとしていた。

だから、アルフレッドもいつか必ずここへ戻ってくるだろう。

そう思うまもなく、玄関にアルフレッドが立っていた。

いや、そうじゃない。

「ピアノを借りていいですか」とバジ君の声が玄関に響き、彼はいつものように八十五%くらいに自分の魂を縮め、恥ずかしそうに、申し訳なさそうに部屋に入ってきた。音をたてないようピアノの前に座って一礼する。

一刻も早く調律が必要なピアノだが、調律が必要なのはたぶん楽器だけではない。楽器を奏でる者と、それを耳にした者の体の中にあるいくつもの秒針のようなものを整える必要がある。

少なくともバジ君の歌はそれを可能にし——いや、バジ君はまだピアノの前に座って目を閉じているだけだが、もう音楽が始まっていた。桜が咲く前に吹き始めるあの因果な風がバジ君の体のまわりで吹き荒れている。その小さな嵐あらしを鎮めるために彼は歌うのだ。

いつだったかバジ君が云っていた。「自分の歌は全部、ねむりうたです」と。

何かが終わって何かが始まるときに吹く風を静かに眠らせるため、彼は体の奥の方から自分の声を呼び寄せて、この部屋のこの空気を震わせる。

それはいつでも甘い歌だった。

アルフレッドがでたらめにピアノを弾き出すと、モカが起き出して抗議を申し立てるように不満げな声をもらした。でも、バジ君の奏でるピアノの音にはうっとりとして聴き入り、だらしなくよだれを垂らさんばかりで、それはおそらく僕自身の姿でもあっただろう。

なるほど、これは「ねむりうた」だと眠りに誘われ、しかし、なぜか頭はよく冴えて、本当はひとつも眠くなんか無い。僕はおそらくバジ君の「ねむりうた」に完全に取り込まれ、眠りの世界でもものすごくクリアな夢を見ているのだ。

冴えているのは夢の中の頭で、夢の中で僕は時間のことや音楽のことをしきりに考えている。

その証拠にバジ君の歌を聴くうち窓の外が明るくなってきたような気がして、（そうか、もう陽が傾いて西陽がさしてきたのか）と外を見ると、そのわずかなあいだに桜が咲き始めていた。

満開ではない。

もし、そんな短時間で満開になっていたら、いま見ている光景は間違はなく夢ということになる。でも、桜はたったいま咲き始めたばかりで満開にはまだほど遠い。

問題はバジ君が部屋に入ってきてからどのくらいの時間が流れたかで、僕の安物時計を信じるなら、およそ一時間といったところだった。

時計の風防ガラスが汚れていたので指先で拭<sup>ぬぐ</sup>つて曇りをとろうとすると、バジ君のピアノの音が途絶えて、頭の中をチャンネルが切り替わる一瞬がよぎった。

歌とピアノだけではなく、バジ君の姿もいつのまにかそこになく、いまいちど時計をあらためると、さらに一時間が過ぎていた。

どうやら僕は眠ってしまったようだった。

バジ君の誘う眠りはとても鮮明で、あまりにはつきりしているので、体は眠っているのに頭が眠っていない。それで眠る前に考えていたことが眠りのあいだもつづいてしまうのだ。

夢の中でそうしたように窓の外の桜を眺めると、白い小さなつぼみがいくつもふくらんで、花もまたひとつの夢から目覚めようとしているように見えた。

\*

花はいつでも魔法が解けたように生き生きと咲いていく。少し目を離していた隙すきに数えきれないほど蕾つぼみがはじけ、はじけたそばから、ひとつふたつと花びらが風にさらわれていく。

流れている時間は速いように見えてゆるやかで、穏やかでありながらも暴力的だった。

花の下に集まる人たちもまた同じだ。慎ましかに花を愛めでつつ、胸の奥でざわつくものを抑え

きれない。

「花のシタでは誰もがアニマルになります」

アルフレッドが毎年そう云っていた。

それで彼は花が咲いているあいだは表に出してあった「ドウゾ、ご自由に本をお読みください」の立て看板を部屋の中に仕舞い、ついでにブリキの星も引っ込めて、一年の埃ほこりを払った。

花見客がぐんと多くなる週末にはドアに鍵かぎをかけた。そうしないと、胸の奥をざわつかせた老若男女が酒と花に酔いしれて編集室になだれ込んでくる。酒に酔った頭はそのうち醒さめるだろうが、花に酔った心はなかなか鎮まらない。

アルフレッドのひそみにならって僕は週末の朝から編集室のドアに鍵をかけた。部屋の照明をすべて落とす、桜の花が二十ワットの電球に匹敵すると知っていたから、花に映えるほのかな光を頼りに机に向かって読んだり書いたりしていた。

とはいえ、花が咲いているあいだは仕事がかどらない。長いときは十日ほどつづくが、年によ

つては風と雨が暴れて、「三日でスベテ散ってしまつたこともあつた」とアルフレッドから聞いたことがある。

散つてしまえば、それでもう人はやつて来ない。でも、咲いているあいだは縁日のようになる。

皆、笑っていた。

花が咲くと人は笑うのだ。もちろん僕も人の子だから、花が咲けば、子供のころのように心が浮ついて、そのうち外の空気を吸いたくなってくる。

窓の外を行き来する花見客の中に伊藤いとさんの顔を見つけた。なるべく誰にも気づかれぬよう、そろそろと通りへ出て声をかけた。

伊藤さんは三丁目の自転車屋の大将で、僕の倍の年齢だ。一年に二度（流星新聞）に広告を掲載してくれるお得意様で、言葉はいまひとつ通じていないようだったが、アルフレッドと妙に気が合っていた。

「おう、太郎君」

伊藤さんはビールで鼻の頭が赤くなっていた。



「アンタんとこのボス、田舎に帰っちまったんだって？」

「ええ」と頷きながら、（どこから伝わったんだろう）と何人かの町の住人の顔が思い浮かんだ。

たぶん、おでん屋の良さんか、〈バイカル〉の棕本さんだろう。ミユキさんが〈バイカル〉でコーヒーを飲んだと云っていたから、そのときに伝わった可能性が高い。

「残念だなあ」と伊藤さんはそう云いながら、まったく残念そうではなかった。生まれながらの恵比須顔で、泣いていても笑顔に見られてしまうから、葬儀に参列するときは、いちばん後ろの席に追いやられる。

「なんていうか、アレだよ、あの人があたの新聞をつづけてくれたから、俺らみたいな者でも報われたんだ」

伊藤さんは——たぶん本当に——笑いながらそう云った。

「だって、そうだろう？　俺らは歴史の本なんかには残らないんだからさ、死んじゃまったらそれま

でだよ。だけど、あの人は俺らが笑ったり泣いたりしただけで記事を書いて残してくれた。まあ、俺の場合は泣いたときも笑ったことになってたけど」

伊藤さんだけではなかった。この日僕は金物屋の野口のぐちさんと話し、耳鼻咽喉科いんこうの坂田さかたさんと話して、花屋の榎本えのもとさんと話した。皆、伊藤さんと同じようなことを云っていた。

彼らが話している相手は僕なのだが、実際には僕の中に引き継がれているアルフレッドに感謝していたのだと思う。

週末の花見客は深夜になっても、なかなか引きあげない。さすがに大きな声をあげる酔客はいなかったが、いつもは静まり返っている窓の外に何人も気配があるので、気が散って仕方がない。  
〈オキナワ・ステーキ〉に避難した。

あるいは、花見客が帰りがけに立ち寄って、席が空いていないかもしれないと危ぶまれたが、先客は一人きりで、静かにカウンターの隅でステー

キを食べていた。

「なんだ、太郎か」

ゴー君も同じことを考えていたらしく、当てにしていた客があらわれないので、いつになく眠たげだった。

「もう、しんどいわ」の決まり文句も、一段と重々しい。

が、「いや、あのさ」とゴー君は目くばせをして、「すぐに見てはダメだぜ」と、ほとんど聞きとれないくらいの小声でカウンターの隅の客をそれとなく指差した。

「ここんところ、二日おきにやって来て、ステーキを食べて帰る。太郎、知ってるか、あの男」

すぐに見るなと云われたので、あくびをするふりをして首をめぐらせたが、視界の端に見えた男の顔には見覚えがなく、しかし、その表情は一目見たら忘れられない険しさだった。

「なんか怪しいんだよ」とゴー君は小さく首を振っている。

ステーキを食べ終えた男が店を出て行くと、外からバイクのエンジン音が聞こえて、「カ、ワ、サ、キ」とゴー君が声に出さずに口の動きでそう伝えていた。

僕はまだ食べている途中だったけれど、ナイフとフォークを置き、唸<sup>うな</sup>りをあげるエンジン音を追うように表へ出て、その後ろ姿を見た。

男はカワサキのバイクにまたがり、排気筒から青白いガスを吐きながら南に向かってまっすぐ走り去った。

(つづく)